

20 世紀フランス美学研究——ルイ・ラヴェルの場合

大阪芸術大学 芸術計画学科 教授 田之頭一知

本研究の対象たるルイ・ラヴェル (Louis Lavelle, 1883-1951) は、20 世紀前半のフランスを代表する哲学者の一人であると言ってよい。しかしながら彼の哲学は、今日、ほとんど表舞台に登場することがなく、ベルクソン哲学が今も盛んに研究されているのに対して、その思想の全容解明が進められているとは言い難い。その理由は、彼の哲学思想が、20 世紀においてはきわめて珍しい形而上学的な色合いを濃厚に示している点に求められるであろう。

西欧 20 世紀の思想状況は、2 つの大きな世界大戦を経て、近代の価値観に対する大きな疑問が生じ、それまでの哲学や思想に対する反動が起こった時代とすることができる。それがフッサールに始まる現象学の流れであり、また、人間を大なり小なり単独者としての実存とみなす実存哲学や実存主義の隆盛であった。フランスではサルトルやメルロ＝ポンティが、ドイツではハイデガーやヤスパーズが、哲学をリードしていた。彼らの哲学は、日常世界の覆いを取り払ったところに生 (なま) の実存を見いだすものと言ってよく、このことは、伝統的な形而上学に対して反旗を翻し、諸現象の根底に横たわるとみなされてきた普遍的原理、あるいは、超越的なものを拒絶する態度を示していると考えることができる。まさに形而上学が批判され、また、否定されるようになっていったのである。このような当時の思想潮流のなかでラヴェル哲学もその意義が問われることとなり、当初、彼の哲学は本質主義的実存哲学などと位置づけられていた。通常の実存哲学では、本質 (essence) と実存 (existence) は相いれないものであり、実存は本質に先立つと定式化される。しかしラヴェル哲学は当時、この本質と実存の関係に関していわば特異な哲学として受け止められていたと言えるだろう。そのような解釈はたしかに誤りではないだろうが、しかしラヴェル哲学の実像、その形而上学的な姿を覆い隠してしまう恐れがある。

彼の哲学の根本はいまだ解明されていないと言わざるを得ないが、その大枠をここで述べれば、acte (活動) の遍在と超越になると思われる。acte はそれ自身で自足しており (「活動はそれ自身、支えも結果も持たない」 *De l'acte*, Aubier, 1992, p. 67)、そこに方向性が付加されると、activité (能動活動すなわち能動性) と passivité (受動活動すなわち受動性) が生じる。この活動の双方向性がおそらくは彼の言う存在 être の内実であると思われ、そうであれば、存在 être と活動 acte は原則として同一性を示すことになる (「活動は存在にみずからを付け加える働き opération ではなく、存在の本質そのものである」 *ibid.*, p. 65)。さらに彼は、この活動の偏在をいわば統括するものとして、大文字で書かれるべき純粹現働 Acte (あるいは Acte pur) を主張していると解される。すなわち、小文字の活動 acte は、大文字の純粹現働 Acte (Acte pur) を分有 participation するのであり、また私たちは、純粹現働に参画 participation することによって、みずからに存在 être を付与することになる。このように彼の哲学は、大文字で書かれるべき Acte と小文字の acte の間の関係を枠組みとして構築されていると解

され、その点で存在 être をきわめて動的に捉えている。ただし、ここで留意すべきは、acte は根本において一性を保ち、いわばその現われ——変容と言ってもよいであろう——が、activité, passivité, action となるのに対し、存在に関しては、そのような現われの多様性 (ないし変容) がおそらく生じないのであり、言うなれば偏差が認められるのみと考えられている点である。存在は普遍的・一義的であるが、活動は原理的に一であり、現象的に多であると言えよう。

さて、上に述べた彼の哲学の枠組みにおいて着目すべきは、大文字と小文字の関係の一端が、純粹さの有無として捉えられている点である。このことが彼の藝術の捉え方のなかにも見て取れると思われる。すなわち彼によれば、純粹藝術 art pur や純粹詩 poésie pure という言葉によって理解されるのは、それが「藝術のための藝術」という捉え方——藝術活動を、自己充足しなければならぬような目的とみなすことによって、精神の他のあらゆる機能から切り離してしまう藝術観——に等しいということだけではなく、すべての藝術の中に、その作業を説明し規制することのできる一つの内的な法則があり、その法則は、あらゆる藝術に素材として役立つ主体と無関係であり、また、作品が受け取ることのできる意味 signification とも無関係だということである (*Science, esthétique, métaphysique*, Albin Michel, 1967, p. 75)。したがって、藝術における純粹さは、まずは文字通り藝術活動から不純物、夾雑物を排除していることであるが、さらにまた、あらゆる藝術に当てはまる内的法則、個々の作り手および作品に内在的であるとともに超越的である法則を有することを意味している。法則の内在かつ超越こそが、藝術における純粹さなのである。それゆえ彼はさらに、純粹藝術の固有な本質において、純粹藝術を創造活動の論理へと還元することができると考え、創造者はひとえに苦悩し愛する存在なのであり、このことを通して創造者が私たちに示すのは、その最も奥深い選択 préférence であり、こう言ってよければ、生に対する最も個人的で最も秘められたその態度である、と述べる (*ibid.*, p. 82)。とすれば、藝術における純粹さは、acte の一つの現われである創造活動において、創造主体からも、また、作られた作品からも超越している面を持つと同時に、作り手が心の奥底において生を愛し、生に対して苦悩することから生まれる態度に見いだされる、ということになるであろう。

以上のことから分かるように、藝術の純粹さを支えているのは、活動 acte の超越と偏在である。創り出されたものである藝術作品は、藝術活動の純粹さにおいて、事物として存在しているのではなく、作品の内奥における活動 acte として存在しているのである。それゆえ作品は、私たち鑑賞者にいわば出会うことによって、活動としての藝術作品たり得るものとなる。すなわち藝術作品は、鑑賞者が存在させるものであると同時に、作品がみずからに存在を与えるものなのである。作品はその点で、閉じているのではなく開いており、この開いた作品であることを、ラヴェル哲学は支えることができると言ってよいであろう。